

へきけんニュース

【ホームページ】 https://www.hokkyodai.ac.jp/edu_center_remoteplace/】

👉 へき地教育に関するオンデマンド研修ビデオ・資料・フォーラム等のお知らせなどが豊富に掲載されています！

✉ kus-hekiken@j.hokkyodai.ac.jp

☎ 0154-44-3291 FAX 0154-44-3292



背景は北海道教育大学釧路校

和歌山大学における へき地・小規模校実習プログラムに学ぶ



北海道教育大学釧路校 講師
へき地・小規模校教育研究センター センター員
小野 豪大

1 「教育実践による地域活性化事業フォーラム報告会」参加概要

2024年3月4日（月）13：20から15：50まで、和歌山大学教育学部教職実践支援ユニット主催の「教育実践による地域活性化事業フォーラム報告会」が同教育学部講義棟（東2号館）にて開催されました。同報告会は、20年以上の歴史を持つ同教育学部のへき地・小規模校実習に関する年次成果発表を目的として、毎年3月初旬に実施される恒例の企画です。この和歌山大学の教員養成の経験に学ぶために、今年度は、当センターから玉井康之センター長、川前あゆみ副センター長、小野豪大センター員の3名が参加しました。全参加者は72名で、うち40名程度は実習に参加した学生及び教職大学院生でした。



2 報告会の流れと和歌山大学の3つのへき地・小規模校実習プログラム



和歌山大学
本山 貢 学長

報告会の流れは、和歌山大学学長及び教育学部長の「開会挨拶」に続き、大講義室で実施されたスライドを用いた「テーマ別発表」と3つの教室で実施されたポスターを用いた「ポスターセッション」の2形式の成果発表があり、最後には教育委員会の指導主事による「発表の講評」と実習担当の客員教授による「コーディネーターチャーによるコメント」といった構成で滞りなく進行されました。



▲ 報告会場の様子



特に成果発表は、1・2年生対象の「小規模校活性化支援事業」、3年生対象の「へき地・複式教育実習」、大学院生対象の「小規模校実習」という3段階に分けて報告されましたが、こうした系統性や連続性が和歌山大学のへき地・小規模校実習プログラムのひとつの特徴を成しているといってもよいでしょう。

3つの実習プログラムの概要はおおむね下記表1のようにまとめられます。

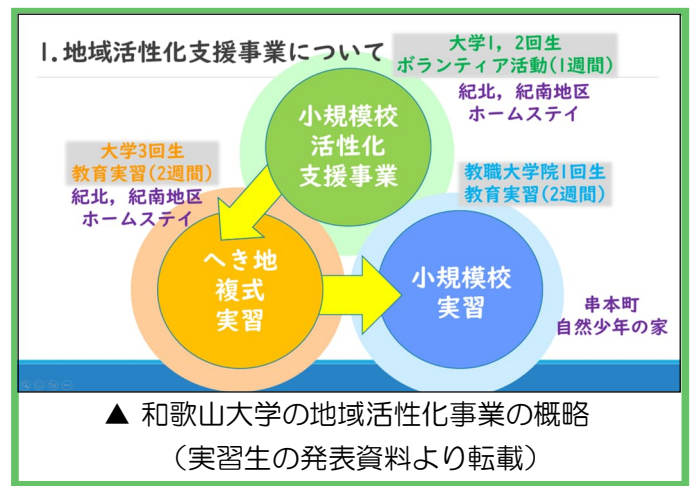


表1 和歌山大学における教育実践による地域活性化事業の概要

	① 小規模校活性化事業	② へき地・複式教育実習	③ 小規模校実習
開始年	2011年度	2002年度	2016年度
対象	主に1・2年生(学部、学年を問わず参加可能)	主免教育実習終了後の教育学部3年生	教職大学院 授業力向上コース必修科目
時期	主に9月	2月中旬～下旬	11月上旬～下旬
期間	3日～1週間	2週間	2週間
滞在形式	紀北、紀南地区 ホームステイ型	紀北、紀南地区 ホームステイ型	合宿型(串本町・ 潮岬青少年の家)
2023年度参加人数	17名	14名	12名
内容	小規模校の体験、運動会等 学校行事支援	授業参観、授業実践、 地域体験	授業参観、授業実践、地域 体験、授業実践の省察

出典：村瀬告二ら「教育実践による地域活性化事業の取り組み—感想文の分析から—」,
『岩手大学教育学部教育実践総合センター研究紀要』第19号44頁, 2020. より引用・著者編集

3 学部生向け「小規模校活性化事業」及び「へき地・複式教育実習」の報告内容

第一の実習である「小規模校活性化事業」の参加者は1・2年生が中心で、小規模校を取り巻く地域やそこに生きる人々の家庭生活を含めて広く浅く体験学習をすることを主眼にしていました。運動会などの行事への支援と参加を通して、教師や子どもたちはもちろん、ホームステイを通してホストファミリーや周辺住民(児童の保護者と重なっていることもあり)と知り合い、さらに一段深いところからコミュニティと教育について体験できるプログラムにもなっていました。

実習生からは「授業補助」「学習支援」「校内清掃、草むしり」「給食配膳」といった通常活動の傍ら、「宿泊研修」「運動会運営・経営補助」「お月見会」など季節行事を体験したという様々な活動報告があり、スライド、ポスター共に実習生全員に共通して書かれていたのがホームステイ先のホストファミリーへの感謝の言葉でした。



各ホームステイ先の様子(さん宅)



▲ 和歌山大学の特色ある取り組みとしてのホームステイ(実習生の発表資料より転載)

工夫を凝らした「小規模校活性化事業」のポスター発表の一例

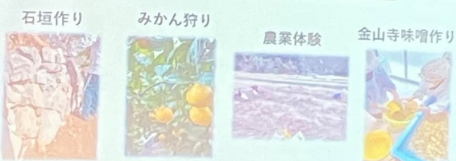


▲ ポスター発表で実習成果をプレゼンする学生と川前副センター長(右)

第二の実習である「へき地・複式教育実習」は、主免実習を修了した3年生が対象となっており、ホームステイなどを通じた地域体験学習を基礎にしながらも、さらに授業参観や授業実践に重点を置いた2週間のプログラムとなっています。この実習は冬季間の2月に実施されているのですが、風雪や寒さが気になる北海道と比べると少し羨ましい気がします。学びの内容は「子どもの実態に合わせた授業づくり」「小規模校の強みや課題」「複式授業の時間配分と机間巡視の在り方」など主免実習の体験と重ねながら、より教室環境に焦点を当てた指導や学習の具体が多かったことが印象的でした。

地域体験学習

体験



▲ 学部3年生による「へき地・複式教育実習」の成果発表の様子

4, 活動を通して学んだこと

- ・授業でのICT活用
- ・一人ひとりに合った関わり方
- ・学校と地域のつながり



▲ 「へき地・複式教育実習」から学んだことの一例(実習生の発表資料より転載)

工夫を凝らした「へき地・複式教育実習」のポスター発表の一例



湯浅町立田村小学校

学校概要

全校児童 48名
1年生 4名
2年生 6名 3年生 10名
4年生 10名 5年生 7名
6年生 11名
2・3年複式 4・5年複式



授業

実習では、4年生と5年生の算数を、それぞれ3時間と2時間担当させていただきました。うまく授業を進められるのか不安でしたが、子どもたちや担当の先生がフォローしてくれたことで、安心して授業を行うことができました。



実習期間中は、さんを中心に運営する「FLAT」で過ごしました。

地域の方々だけでなく他大学の方たちも来ており、様々な活動をされていました。また、休日はさんのみかん農園で石垣づくりを手伝わせていただきました。大変な作業でしたが、完成した際はとても大きな達成感を味わうことができました。

ホームステイ



学校行事

実習期間中に、「もちつき大会」や「しょうゆしぼり体験」がありました。「もちつき大会」では、先生方だけでなく、たくさん保護者の方が協力しており、学校と家庭のつながりを強く感じる事ができました。「しょうゆしぼり体験」では、子どもたちが作った「もろみ」を絞り、できた醤油を瓶詰めする作業と一緒に行いました。



成果と課題

成果

学校行事やホームステイ先において、つながりの強さを感じることができただけでなく、様々な場面で、そのつながりが活用されていることを学ぶことができた。

課題

先生の立ち位置や教材の大きさといった説明や問題解説の際の注意点、板書の仕方など様々な課題が見つかりました。また、前回の実習において課題だった声の大きさも改善することができなかったため、今後の実習などを通して克服していきたいと思えます。

小規模校の強み

- ・挨拶をする、授業を真面目に受けるなど、当たり前でいて、実行するのは難しいことがきちんとできている。
→少人数のために、指導が行き届いている。
- ・先生方が穏やかで、ゆとりがある。
→子どもにも良い影響を与えていて、安心できる人間関係や学習環境が整っている。
- ・きめ細かな個別指導がしやすい。
→特別支援でも教職員全体が一貫したサポートができる。

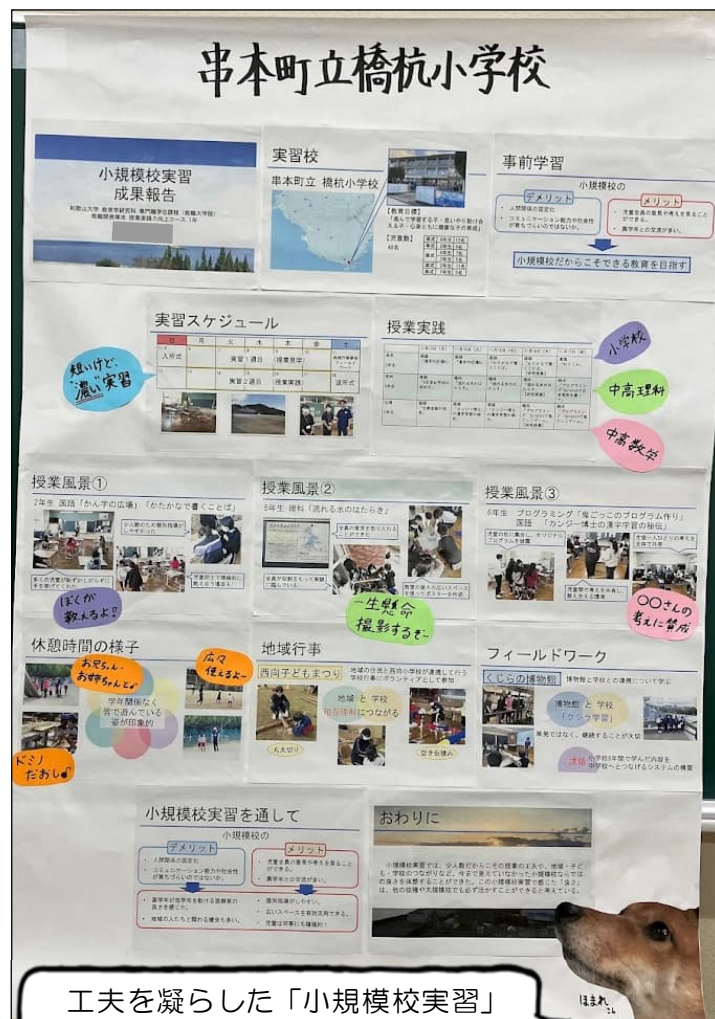
▲「へき地・複式教育実習」では小規模校の強みも実感する（実習生の発表資料より転載）

4 大学院生向け「小規模校実習」の報告内容

第三の実習である「小規模校実習」は教職大学院の学生を対象としたプログラムであり、他の教職大学院には見られないユニークなへき地・小規模校実習と言えます。内容的には地域体験学習と授業参観及び授業実践に重点が置かれており、滞在形式は参加者全員による合宿型で、複数の実習校に通勤する学生たちが主体的、協働的に実習に取り組みながら、より省察的な学びの機会を確保しやすいようにデザインされていました。



▲ 大学院生による「小規模校実習」の成果発表の様子



工夫を凝らした「小規模校実習」のポスター発表の一例



▲ ポスター発表で実習成果をプレゼンする学生と玉井センター長（左）

実践報告では4年生のプログラミング教育「Scratchで音楽を作ろう」（2時間）や5年生の理科「単元：流れる水のはたらき」（3時間）など、各実習生の得意分野に引き寄せた活動や、紀南地区の小学校と博物館の連携事業である地域学習プログラム「くじら学習」に関する研修など、より専門的な実習の取り組みも見られました。



実習校

明神小学校 1-2年生 3-4年生 複式 5-6年生	高池小学校 複式学級無し
橋杭小学校 3-4年生 複式	出雲小学校 2-3年生 複式 4-5年生 複式
西向小学校 2-3年生 複式 4-5年生 複式 3-4年生 (特別支援)	

▲ 「小規模校実習」の対象校と合宿地を示したスライド（実習生の発表資料より転載）

まとめ

小規模校の課題

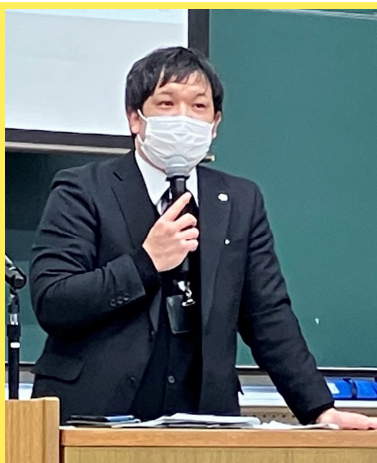
人間関係の固定化	縦割り活動	大切なのは 人との “繋がり”
学びの幅減少	“より”主体的な活動	

実習を通して...

▲ 大学院生が「小規模校実習」を通じて学んだことの一例（実習生の発表資料より転載）

5 講評等に見る特記事項

まず、ひとつは本山貢学長が冒頭の挨拶の中で触れた「和歌山大学教育学部と和歌山県教育委員会の連携協定」についてです。この連携協定は、和歌山大学の系統的な実習への取り組みを制度面で支える基盤となっており、小規模校活性化支援事業やへき地・複式教育実習に参加した学生の教員就職率は他の学生に比べてかなり高いとのことでした。こうした実習の積み重ねが、学生の教職へのモチベーションや教員就職率を高める役割を果たしていることは、他の地域にも参考になる動きだと感じました。



和歌山県教育庁
中瀬 雅之 指導主事

もうひとつは、和歌山県教育庁学校教育局義務教育課教育課程班の中瀬雅之指導主事による講評でした。今年度の和歌山県内の小中学校においてへき地指定校は11%、複式校は21%、小学校のみ複式校は30%になり、また欠学年も増加しているという教育状況の解説も、こうした実習や教員養成の背景を理解する上で重要なものでした。また、中瀬指導主事は、ご自身も2003年に「へき地・複式教育実習」に参加した経験から、「20年以上前にお世話になったホストファミリーや教えた児童といまだに交流があり、たった2週間の実習も一生続く濃い体験になる」、「へき地・小規模校教育は教育の原点とも言われるので、実習体験は将来どの学校種・学校規模で働く場合も必ず生かされる」と述べていたことも印象的でした。

会場の実習生の中にはうなずきながら聞く学生も多く、こうした先輩からの心のこもった励ましやアドバイスの言葉をもらえることもまた貴重な学びの機会になっていると感じました。



小規模校活性化支援事業に参加した学部1・2年生のポスターセッション会場にて



群馬大学等の視察受入報告



北海道教育大学釧路校 教授
へき地・小規模校教育研究センター 副センター長
川前 あゆみ

去る令和6年2月1日、群馬大学共同教育学部から6名と同附属中学校から2名、さらに群馬県教育委員会から3名の計11名による視察を受け入れました。視察の訪問先は、浜中町立散布小中学校、浜中町教育委員会、本学へき地・小規模校教育研究センターです。

視察目的は、群馬県の山間地域にあるへき地・小規模校等の取組をサポートするシステムを構築するために訪問されました。具体的には、本学へき地・小規模校教育研究センターの取り組みの実際、へき地・小規模校における現職教員の学習支援の状況、へき地・小規模校における遠隔授業についての研修内容でした。

当日は、早朝から学校視察に向かい、浜中町立散布小中学校を訪問させていただきました。最初に村瀬校長から丁寧な学校概要の説明を受けたあと、各学級の授業参観の時間を設けていただきました。小学校では低・中・高学年の複式学級があり、複式学級の学年別指導が行われていました。特に、一人学年と複数人の児童で構成された高学年の複式学級では、「わたり」「ずらし」の指導をはじめ一人学年の学びを深める間接指導時の工夫や、ICT活用の工夫の場面もありました。また、中学校は一人学年の学級もあり授業展開に発問の工夫が凝らされていました。



▲ 浜中町立散布小中学校にて学校概要の説明を受けている様子



▲ へき地・小規模校教育研究センター研修室にて本学の教育研究活動について説明を受けている様子

次頁には、訪問者から寄せられた視察報告のコメントを掲載いたします。浜中町の学校と教育委員会との取り組み、本学の教育研究について語られていますのでご紹介いたします。

散布小中学校の教育実践から学んだこと

群馬大学共同教育学部英語教育講座 津久井 貴之

散布小中学校では、校舎見学及び授業参観をさせていただきました。村瀬校長先生のご説明中、「へき地教育は教育の原点である」、「中学校の生徒と来年どんな学校を作りたいかという話をしている」というお言葉から、学校経営への熱い思いとともに、先生方と子どもたちと地域が一体となって学校づくりを進めている姿を学ばせていただきました。へき地であるかどうかに関わらず、目指すべき学校の在り方を考えるよい機会となりました。

一方、各教科の授業では「個人学習」や複式学級での「ずらし」や「わたり」のご指導の様子から、へき地教育特有の指導技術を目の当たりにしました。また、国語の授業では、タブレットを用いて素早く外来語の由来を調べている児童と紙の辞書を使ってじっくりその意味や由来を確認している別の児童の協働的な学びの場面を拝見しました。さらに、振り返りの学習過程で5・6年生が学年の垣根を超えて共に学び合う姿は、複式学級のよさが現れた印象的な場面でした。散布小中学校で学んだことを群馬に持ち帰り、「指導の個別化」や「学習の個性化」の実現に向けて、群馬のへき地それぞれに合った学校支援を模索していきたいと思います。最後になりましたが、この場を借りて散布小中学校の先生方、児童・生徒の皆様に御礼申し上げます。

浜中町教育委員会、北海道教育大学の皆さまとのやり取りから学んだこと

群馬大学共同教育学部数学教育講座 小泉 健輔

浜中町教育委員会、北海道教育大学釧路校の皆さまから、へき地・小規模校教育の充実に関する様々なお話を伺うことができました。まず、浜中町教育委員会においては、教育長 佐藤健二様をはじめとする方々のご説明により、教育委員会と学校との協力関係の構築等に関するご示唆をいただきました。特に「学校も教育委員会も小さい中で、お互いに求め合い、協力し合っていかなければ課題を解決していけない」というお言葉が印象に残っております。「打ち上げ花火的に研究授業だけを行うのではなく、継続的に何回も検討を重ねる」といった点は、授業研究において広く大切にすべき視点であると感じました。

北海道教育大学釧路校へき地・小規模校教育研究センターにおいては、越川茂樹釧路校キャンパス長、川前あゆみ副センター長をはじめとする先生方とのやり取りから学ばせていただきました。テクニカルサポート事業、へき地校体験実習等の先進的な取り組みについてお話を伺いながら、予算、時間、協力関係の3つの観点からの検討が重要であることがわかりました。学校支援や教員養成等における成果と課題の両面から学ぶことができ、大学の立場からでき得ることは何か、実際上の検討課題は何かについて、具体的なイメージをもつことができました。今回得た学びを群馬県に持ち帰り、へき地・小規模校教育の充実に関する議論を深めていければと考えております。最後になりましたが、今回の視察においてご対応くださった皆さまに、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

研究紀要「へき地教育研究」第78号が完成しました



北海道教育大学へき地・小規模校教育研究センター

北海道教育大学では、戦後以来毎年、へき地教育に関する学術紀要として『へき地教育研究』を刊行しており、令和6年3月に第78号を刊行しました。

この紀要は、全国の大学研究者に活用されているだけでなく、教育行政・学校など教育各界からも引用されるケースも多く、様々な観点・方法から教育社会貢献に役立っています。この間全国的な少子化・小規模校化の中で、研究紀要の引用や問い合わせ、資料調査訪問などが毎年増えています。

第78号には、13件の論文、研究ノート及び教育実践記録が収録され、この他にもへき地・小規模校教育研究センターの年間の活動記録やフォーラムの様子が掲載されています。

第78号含め一部のバックナンバーは下記のURLやQRコード（へき地・小規模校教育研究センターHP「へき地教育研究」）から閲覧いただけます。



(URL https://www.hokkyodai.ac.jp/edu_center_remoteplace/public/bulletin/edu_research/)

読者の皆様からの掲載記事を募集しています

へき地・小規模校教育に関するトピックや行事案内など、へきけんニュースへの掲載希望がありましたら、原稿や画像をお送りください。

送付・お問い合わせ先

へき地・小規模校教育研究センター事務局

☎ 011-778-0942

✉ crc@j.hokkyodai.ac.jp